

(10) かんしょの主要な病害虫

病害虫	被害の概要
蔓割病	植付け後に葉が黄化し、茎の伸長が悪く、茎に割れ目が発生し葉が黄変して枯死する。砂地や高温の年に発生が多い。発生圃場での連作を避け、種いもや苗を完全に消毒する。
黒斑病	植付け後に下葉が黄化して落葉し、生育を停止する。種いもや苗によって感染し、畑での防除は困難である。
黒星病	8～9月に発生する。葉に始め褐色の1～3mm程度の円形の病斑が現われ、淡褐色～灰褐色に変色して葉が枯死落葉する。銅製剤の効果が高い。被害葉の処理、種いもの消毒を完全に行なう。
立枯病	植付け後、つるが伸び出さず、葉が黄色～紫紅色を帯び、しだいに萎れ生育が不良となり枯れる。塊根の表面に円形の黒色の病斑ができ、古くなると陥没しコルク化する。 土壌伝染する。地温が高くなるマルチ栽培で発生しやすく、土壌が乾燥しているほど発生が激しい。
サツマイモ基腐病	地際の茎が黒変し、地上部が萎凋、枯死する。塊根は成り首からゆっくりと腐敗する。定期的な苗の更新、苗・苗床の消毒、排水対策の徹底、残渣処理、土作りも含めた計画的な輪作等を実施する。
ナカジロシタバ	西日本の暖地に多く、成長すると全葉を食害して大被害を及ぼす。年3～4回世代をくり返し、被害は秋期に最大となる。発生初期にDDVP乳剤やディプロレックス乳剤で防除する。
イモコガ	苗床から収穫期まで幼虫が食害する。糸を出して葉を巻き、内部にひそむ。暖地では6～7世代、中間地で4～5世代をくり返す。防除法は、ナカジロシタバと同様である。
ハスモンヨトウ	幼虫が葉の裏面を食害し、表面だけが残る。葉が白くなるので発見は容易である。4世代をくり返し、防除法はナカジロシタバと同様である。
コガネムシ類	幼虫の発生は8月中旬頃に最高となるので、防除は、幼虫の発生初期の7月上旬にダイズハム粒剤、微粒剤、バイズット粒剤などを施用するかセンチュウ防除を兼ねて土壌消毒を行う。

病害虫	被害の概要
ネコブセンチュウ、ネグサレセンチュウ	初期生育の遅れや栄養障害症状、いもの奇形と表面の褐色～黒褐色の斑点などの被害がでる。連作をさけ、落花生などの拮抗作物の栽培に加えて、青果用の栽培では加硫リン、DDで消毒する。
アリモドキゾウムシ、イモゾウムシ	ヒルガオ科植物の茎葉及び塊根等に寄生する熱帯地域由来の昆虫。食害された塊根は苦みと悪臭を生じ、食用はもちろんのこと家畜用の飼料にもならない。 植物防疫法により特殊病害虫に指定されており、発生国からの寄主植物の輸入及び既発生地域（アリモドキゾウムシはトカラ列島の口之島以南、イモゾウムシは奄美大島以南）から未発生地域への移動が禁止されている。